2014 年　　月　　日（　　）

インタビューをしよう！

一年　　組　　番（　　）

○Unit Question：インタビューで大切なことは何か？

○インタビューを分析する

①Ａ君がＢ君の趣味についてインタビューしました。

Ａ　あなたの趣味は何ですか。
Ｂ　サッカー観戦です。
Ａ　それはなぜですか。
Ｂ　個人プレーとチームプレーが複雑にからみ合っているところがいいんです。
Ａ　……ええと、……他のスポーツは好きですか。
Ｂ　サッカーほどではありません。
Ａ　それはなぜですか。
Ｂ　さっき言ったようなことが、他のスポーツでは少ないからです。
Ａ　ありがとうございます。

②羽生善治氏へのインタビュー「決断力を磨く方法」（裏面参照）

羽生善治氏へのインタビュー「決断力を磨く方法」　プロトコル

イ　**勝負所で決断をどのようにされているんですか？決め事とかってあるんですか？**

羽　やっぱり、あの～大事なのはですね。非常にまあ、こう～、自分自身を信じるっていうことは、一つあると思うんですよ。逆に言うと、それを信じられるかっていうのは、一番難しいところなんですよ。どうしてかっていうと、他の人のことは１００％は知らないわけですよ。だからある意味すごくこう、神格化してしまったりとか、信用してしまったりできるんですけど、自分自身のことはウソがつけないっていうか、こうやってる日常のことは全部もう知っているわけなんで、かえってそこで信用しろって言われると大体できないんですよ。いや、ホントに。だからそれは、結構ですね。如何にそれを信じることができるかっていうのはすごい大事な要素。だからそういう意味では日常が非常に大事と言えば大事なことだと思います。

イ　**日常から自分を信じられるように。**

羽　そうですね。だから、そういう風にしていれば、そういういざっていう決断するっていう場面になった時にあまり不安な気持ちにならなくて済む。

イ　**そうすると、実際に決断をする時に大切になることというのは、日常から自信を積み重ねていくこと。**

羽　そうですね。あとは、あの、もう一つはですね。あの～何て言うんでしょうかね。こう・・・やっぱり、感覚的なものとか、そういうのを結構、あの～何て言うんでしょうかね、研ぎ澄ませておくっていう感じですかね。今って特に知識っていうか、情報がいっぱいあるんで、どうしてもそれに流されやすいっていうか、そういう方向にどうしてもたくさんの時間を費やさざるを得ないので。そうではない、あの～、持っている、その、え～、能力っていうか、まあ、力と言うんでしょうかね。そういうのを、あの、こう、アンテナを張っておくというか、センサーを磨いておくというか、そういう感じはすごい大切だと思います。

イ　**感覚を大切にする。**

羽　うん、そうですね。つまり、何て言うか、そういう・・・大切にするんですけど、あの、え～と、どう言えばいいんでしょうかね。普通に暮らしてるとですね。結構、今、できなくなっちゃうんですよ。どうしても。

イ　**はい、そうですね。（↑あいづちとして）**

羽　それはあの、何ていうか、意識してそういう風にしてるっていう感じですね。

イ　**自分が大勝負を、対局をする中で、ま、羽生さんは、その、ご本の、『決断力』という本の中で、あえて自分自身が得意ではない戦法を使って、やることがあると。その中で、得られるものがあるということなんですけども。なんで、そういう風にされるんですか？**

羽　あ～、そうですね。あの～、ま、簡単に言うとですね。あの～、今、次の一局に勝つ最善の戦略は、長期的には最善ではないっていうことがあるんですよ。ええ、つまり手堅く良く知ってる形でやるっていうのは、この次の一局に勝つっていうためにはベストなんですけど。じゃあ、５年後とか１０年後のベストな選択かっていうと、そうではないっていうことなんで。だから、そのへんの、あの～、加減を知るためにそういうことをやっているっていう感じです。ええ。そのへんの加減をどれくらいまで飲み込む、どれくらいまでアクセルを踏み込めばいいのか、どれくらいまでリスクをとればいいのか、っていうのをやってみるっていうのと。あと、あの～ですね。実行してみなければ、行動してみなければ、やってみなければ学べないものってやっぱりあるんですよ。どんなに、あの、こう、いっぱい資料を集めて、いろいろ分析しても、やってみなきゃわからないとか、やってみないと学べないものとか吸収できないものって絶対あるんで。それが大きい舞台とか正に真剣勝負のところとか、実際にそれでどうなるかとか、あるいは本当にそれで、何ていうんでしょうかね。あの、怖い思いをしてとか、薄氷の上をこう歩くようなつもりでやっていく中でしか、学べないとか、吸収できないものっていうのはやっぱりあると思います。

2014 年　　月　　日（　　）

インタビューの実際

一年　　組　　番（　　）

○今回のインタビューの流れ

A 班

第一インタビュアー　事前に考えた質問①をする。
←
第二インタビュアー　ゲストの解答に関して、その場で考えた質問をする。
←
（第一・第二インタビュアーのどちらかがさらに質問をする）
←

B 班

第一インタビュアー　事前に考えた質問②をする。
←
第二インタビュアー　ゲストの解答に関して、その場で考えた質問をする。
←
（第一・第二インタビュアーのどちらかがさらに質問をする）
←
…

○自分の班の担当

質問「　　」

第一インタビュアー…

第二インタビュアー…

○予想される答えとそれへの対応

○当日メモ

2014 年　　月　　日（　　）

○今日のインタビューで良かったところ

○もっとこうした方が良いと思ったところ

○Unit Question：インタビューで大切なことは何か？

インタビュー　参考資料

一年　　組　　番（　　）

自覚なき急成長

詩織　私にインタビューですか？　三行くらいで終わっちゃうかもしれないな（笑）。

――いや、お聞きしたいことはたくさんありますので。実はどのタイミングで玉井さんのインタビューをやろうかってずっと悩んでいたんですよ。紅白の終わったあとに話を聞きたいとは思ったんですけど、ちょうど髪の毛を伸ばしていて『試練の七番勝負』のときにツインテールにしたじゃないですか？　このまま伸ばすんだったら、もう一号待ったほうが写真的にいいのかなぁ、と思ったり。

詩織　あれは伸ばしていたわけじゃないんですよ。なかなかカットする時間がなくて、結べるぐらい長くなっちゃったから、ちょっと結んでみただけで。本当に切れるものなら、明日にでも切りたいと思ってました（笑）。

――さて、どうして紅白が終わったときに玉井さんに話を聞きたいかと思ったかというと、リハーサルをずっと追わせていただいていたんですけど、ボイストレーニングのときにちょっとビックリしたんですよ。

詩織　えっ、なにがですか？

――僕たちは部屋の隅で打ち合わせをしていたんですけど、玉井さんだけ明らかに声量が違うんです。

詩織　ウソだぁ～。

――いや、本当です。遠くにいても二度見してしまうほど、声量がものすごくて……ひょっとして、自覚、ないですか？

詩織　ないです。

――客席から見ていると、昨年の『ももいろ夜ばなし第一夜 白秋』（一一月一七日、Zepp Tokyo）のあたりから「あれっ、こんなに歌声に安定感があったっけ？」と感じて、その直後にリリースされた「サラバ、愛しき悲しみたちよ」の後半パートでセンターを張っている姿を見て、あぁ、やっぱり上手になったんだ、と。

詩織　うーん、自覚はないんですけど、前はちょっと歌ったら、すぐに喉が枯れていたんですけど、最近ではそういうこともなくなったので、あっ、喉が強くなったんだな、とは感じます。

――それはいつぐらいからでしょう？

詩織　いつだろう？　これもまったく自覚がないんだけど（笑）、『猛烈宇宙交響曲・第七楽章「無限の愛」』で一気に音域が高くなったから、そこで鍛えられたのかな？

――昨年の春ぐらいのタイミングですかね。

詩織　春の横アリぐらいから、ボイトレをするようになったんですよ。それまではちゃんと習ったことがなかったので、一から教えていただいて。それでちょっとだけわかってきたのかなぁって。

――じゃあ、やっぱりその成果が着実に出ているってことですね。

詩織　そうですね。ボイトレをやってきて、逆に成果が出てなかったら困る（笑）。でも、まだ歌っていると苦しくなるので、もっと改善していかなきゃねって先生とも話しているんですけど。

――僕は音楽的な技術に関してはまったくの素人なので、あまり偉そうなことは言えないんですけど、ボイトレでも先生から指導されると、一回でモノにしてしまうというか、コツを掴むのが上手なんだな、と思います。

詩織　あぁ～、よく「器用貧乏」って言われますね。

――そういった側面はあるかもしれません。

詩織　本当に損してる～！

――ただ、器用ということは、もうちょっと上手に出せるようになれば、貧乏ではなくなると思います。「器用な人」になれる。

詩織　貧乏じゃなく……うん「器用大富豪」にならないと（笑）。

――でも、声の出し方や歌い方がうまくなるということは、過去の曲もまた違って聞こえるようになるわけで、本当に可能性は広がってきますよね。

詩織　でも、先生からはまだ最近の曲のほうが深くやっているから、昔の曲とは差があるって言われるんですよ。だから、まだまだこれからなんだと思います。

――なるほど。でも、ここまで実感がないとは思いませんでした。もう少し、ステージで手応えを感じているのかな、と。

詩織　でも（ライブを）二日間やったのに、全然しゃべれるんで！　本当に喉は強くなったなぁ、とは思います。

参考文献　クイック・ジャパン（二〇一四）『ももいろクローバーZ ～Compass of the dream～ 2013-2014』太田出版

2014 年　　月　　日（　　）

インタビュー　参考資料２

一年　　組　　番（　　）

言葉の湖に水路をつなぐ　訊くⅠ

ノンフィクションの書き手としての私の仕事の中心には、人に会って話を聞くということ、つまりインタヴューをするという作業が常に必須のものとしてある。

相手の人物の経歴や体験、ある事件に関する情報や見解、あるいはひとつの事象に対する知識や感想。すなわち、その人が「知っていること」を喋ってもらうためにインタヴューをする。

しかし、インタヴューには、相手の知っていることばかりでなく、「知らないこと」まで喋ってもらうという側面が明きらかに存在する。そんなことをいうと、知らないことなど喋れるはずがない、と反論されるかもしれない。だが、質問を投げかけられることで、その人が自分でも意識していなかったことを自身の内部に発見して喋ったり、思いがけないことを口走ったりするということは、必ずしも稀なことではないのである。

私はインタヴューをすることで口に糊しているにもかかわらず、インタヴューをされるのが好きではないのだが、それでも年に何回かは応じざるをえなくなる。そのような時、極めてすぐれたインタヴュアーに遭遇すると、自分でも意外と思えることを喋っていることがある。そうか、自分はこんなことを考えていたのか、こんなことにこだわっていたのかとあらためて気づかされたりする。それは、どこか、格闘技のプレイヤーたちがすぐれた対戦相手をもった時に通常とは異なる力量を発揮するのに似たところがある。自分以上の自分になる契機を与えられるのだ。

逆に、自分がインタヴューする側にまわった時、いったいどれほど「自分以上の自分になる」契機を与えることができているかは自信がないが、ともかく、インタヴュアーにとっての喜びは、どうしても口を開いてくれない相手から大事なひとことを聞き出すということと、相手が自分の喋っていることに自分で驚いているという瞬間に立ち会えることであるように思われる。

かつて私は、あるラジオの番組で森進一をインタヴューしたことがあった。インタヴュー嫌いで口が重く、質問に対してほとんどまともな答が返ってこない人物であるという評判が、インタヴュアーとしての私の功名心を刺激した。

私は彼に関する資料を膨大に読み込み、インタヴューに臨んだ。そして、まず最初に、なぜインタヴューが嫌いなのかを訊ね、いつも同じことばかり質問されるからという予想通りの答を引き出すと、私はその種の質問をするつもりのないことを明らかにした。その答なら資料で充分だった。私は、彼が彼自身の言葉で答えるより仕方のないことを訊ねはじめた。彼は考え考え、口ごもりながら喋ったが、決していい加減な答え方はしなかった。やがて質問がスターであることの恍惚と不安というところに収斂（しゅうれん）していくと、彼の口調にも熱がこもってきた。私も彼の熱っぽさに巻き込まれ、事前に用意しておいたものではない問を、ふっと口に出していた。

「デビューして十年ですか……いま思いだしてみるとあの頃の自分はすごかったなあ、光り輝いていたなあっていう、そういう時代の自分が見えませんか？」

彼はしばらくして小さく頷き、私を見つめながら実はその向こうのはるか遠くを眺めるような眼をして言った。

「あの頃は……何というのかなあ……眼の前にくるものを次々と片付けていったというか、振り返ることを知らなかったですね。たとえば、すごく斬れる日本刀を持って、スパッ、スパッと竹藪を斬っていくみたいな感じでした」

私はそのひとことにゾクッとした。その比喩は単に鮮やかなだけでなく、スキャンダルにまみれ、ヒット曲もなく、人気が下降しつつある現在の彼を、くっきりと逆照射してもいた。

ゾクッとしたのは私ばかりでなく、当の森進一も同じだったらしく、その時点から急速に自分から喋ることが多くなっていった。そして、その言葉は想像以上に豊かなものだった。インタヴューにおける彼は、言葉が貧しかったのではなく、単にそれを解き放つ機会がなかったにすぎないようだった。その時、私は功名心などとは別の次元で密かに納得するところがあった。インタヴュアーの役割のひとつは、相手の内部の溢れ出ようとしている言葉の湖に、ひとつの水路をつなげることなのかもしれない、と。

（83・3）

出典　沢木耕太郎（一九九三）『象が空を』文藝春秋

TVダイアリー

国谷　裕子②

想定問答を捨てるとき

日々の放送や準備に追われ、なかなか映画館に行けない。やっと連休を利用して観た「フロスト×ニクソン」。終わって体ががちがちになり、しばらくは席を立てなかった。

ウォーターゲート事件で窮地に陥り辞任したニクソン大統領にテレビ司会者フロストがインタビューを挑む。名誉を挽回したいニクソン、制作側が引き出したい謝罪。最初に何を質問するのか、相手のペースにはまらない作戦は何か。相手がどう答えるかを想定し、どう投げ返すかを周到に準備する。フロストに次第に加わるプレッシャーがスクリーンから伝わってくる。途中から他人事とは思えなくなった。

「クローズアップ現代」でたびたび経験しているが、想定通りにならないのがインタビュー。果敢に挑戦的な質問をぶつけたと思っても、正面から答えてもらえず、長々とした説明で与えられた時間が過ぎ去る。傍らで見守るプロデューサーの失望や焦りが頭をよぎり、大汗が流れる。

一番嬉しい瞬間は、その人でなければ言えない言葉、その人ならではの表情を引き出せた時だ。準備で積み上げられた想定問答を捨てることが出来れば「その時」が訪れるチャンス。映画の中のフロストも、大詰めで質問のファイルを投げ捨てた。「やった！」。私は心中で快哉を叫んだ。

事前のファイルを捨てて、「その時」を数多く経験できればと願っている。

（キャスター）

出典　国谷裕子「想定問答を捨てるとき」『朝日新聞』TVダイアリー（二〇〇九年五月一〇日）

2015 年　　月　　日（　　）

インタビュー　プロトコル（1組）

一年　　組　　番（　　）

ゲスト　渡邊先生
5班第一インタビュアー　Aさん
5班第二インタビュアー　Bさん
6班第一インタビュアー　Cくん
6班第二インタビュアー　Dくん
3班第一インタビュアー　Eさん
3班第二インタビュアー　Fさん
2班第一インタビュアー　Gくん
2班第二インタビュアー　Hさん
1班第一インタビュアー　Iくん
1班第二インタビュアー　Jくん
4班第一インタビュアー　Kくん
4班第二インタビュアー　Lさん
司会　廣瀬

（以下、敬称略）

廣瀬　それでは、今日の「この人にインタビュー」。ゲストは渡邊先生です。

一同　（拍手）

渡邊　よろしくお願いします。

廣瀬　え、今日は、まあ、先日の国際教養の時間にお話しをしていただいた難民キャンプのことであったり、まあ、日々の司書のお仕事を中心に、え、インタビューをしたいと思います。では、インタビュアーの方、よろしくお願いします。

A　では、最初の質問なんですけど、図書館をつくる上で持ち続けた気持ちは何ですか？

渡邊　あ、えっと、難民キャンプの方ですか？ここの図書館ですか？

A　難民キャンプの方

渡邊　難民キャンプの方。難民キャンプの方の図書館は、んー、子供たちが喜んでる姿が、えーと、常にやっぱり気持ち、あの、心の中にあって、そういう子供たちの姿を次の難民キャンプ、次の難民キャンプでも増やしていきたいっていう想いが、三年間続いたんだと思います。

B　はい、では、その一、難民キャンプで図書館をつくる上で持ち続けた気持ちを、っとー、ま、ミャンマーの方で、っとー、今年の夏つくる時もそのような気持ちを持っていたのですか？

渡邊　そうですね、あのー、もう十年、難民キャンプの時から十年経っていたので、最初はちょっと忘れかけてたところがあったんですけれども、いざ現地に行ってみたら、あのー、暑い温度から、あと、裸足で歩き回ってる子供たちの姿を見たら、急に、こう、思い出してきて、一気に十年の年月がビッと縮まった感じがして、気持ちが昔の自分に戻った気がしました。はい。

B　ありがとうございます。

C　っと、えっとー、その、図書館に、その、置く本を選ぶ時に気をつける点は何ですか？

渡邊　ごめんなさい、図書館の？

C　図書館に置く本を選ぶ時に気をつけたいことって何ですか？

渡邊　あ、置く本。んーと、いろんなバラエティに富んだ本を選びたいと思いました。っていうのは、物語の絵本であったり、写真絵本であったり、ほんとにあったことであったり、動物が主人公だったり、人間が主人公だったり。いろんな本を選んで、えーと、様々な世界に子供たちに出会ってほしいなと思って選びました。

C　あー、では、つまり、その、絵本でも、こう、子供たちの観る絵本でも構わないっていうことですか？その、幼児向けの、そういう本でも。

渡邊　あ、絵本でも子供向け、あの、赤ちゃん向けの絵本を選んだり、幼稚園児向けの絵本を選んだり、小学生向けの絵本を選んだり、っていうことで、絵本でも易しいものから難しいものまで様々選んでました。

D　ああ。

渡邊　様々なバリエーションを、揃えたということですね。

E　はい、そうなんです。

渡邊　えっと、難民キャンプの時の話になるんですけど、あの、難民キャンプでボランティアをされていた時に、あの、一番辛かったことは何ですか？

F　一番辛かったことは、あのー、難民キャンプに図書館ができた時に、ある日、鉄砲水で図書館がバーッと流れてしまって、せっかく図書館で過ごして、将来は、あのー、絵本作家になりたいとか、先生になりたいとか、夢を描いてた子供たちもずいぶん亡くなってしまった事故があったんですけれど、その時は、図書館が流れたこともちろん悲しかったんですけれど、多くの夢と希望をもった子供たちも大勢亡くなってしまった事故が、すーごく悲しかったですよね。

渡邊　えっと、あのー、その一、えー、流されたことによって、あのー、次への目標、あの、その、前、あの、お話された、失敗が、えっと、あのー、〔聞き取れず〕ってお話されたと思うんですけど、

F　ええ、ええ、ええ、ええ（あいづち）

渡邊　そういう〔聞き取れず〕、心構えはどのようになりましたか？

F　そうですね、しばらくはちょっと悲しくて、泣いてるような日も多かったんですけれども、あの、難民キャンプの人たちも、自分の家も流されてしまったり、学校も流されてたり、あの、すごくー、大変な中、ぜひともやっぱり図書館をもう一度建て直したいっていうことを、難民キャンプの人たちの方が言い始めてくれて。それを聞いた時にとても嬉しかったです。っていうのは、難民キャンプの図書館というものが、もうあのー、暮らしてる人たちにとって、必要な施設になってたから、ぜひともやっぱり子どもたちのために作り直し

てほしいという声があがったと思うので、その事故は辛かったんですけど、「あ、図書館が根付いてきてるんだな」ということを、すごく思わせてくれました。

F　では、やっぱり達成感っていうものが達成感っていうか。あのー、援助でできた図書館というよりも、キャンプの人たちが「自分たちの図書館なんだ」っていう気持ちに、こう、なってきてくれてるんだなっていう気になりました、その時は。

渡邊　（うなずく）

F　与えられた図書館というよりも、自分たちの、で、また作り直そう、作り直す図書館、という気持ちになったこと

渡邊　〔聞き取れず〕

F　んー、その時の感激がですか？

渡邊　あ、はい

F　あ、そうですね。なかなか日本に戻ってきてからは、それこそ大きな感動っていうものがなかなか出会えてないかも知れないです。はい。

渡邊　ありがとうございます。

F　ありがとうございました。

G　えっと

渡邊　はい。

G　日本に帰ってからなんですけど、たぶん、あ、えーと、本を出版する時に一番大変だと思うことは何ですか？どのようなことですか？

渡邊　大変、だったことは、一冊目の本を書いた時には、書きたいことがあまりにも多すぎて、本に、結局本になったことの三倍ぐらいは、もう、たくさん書いてしまったんです。それを、こう、ここはいらない、ここもいらないという風に、編集者の人にちょん切られることがすごく辛かったです（笑）。うん。全部を残したかったとは思います。

H　その、編集者にちょん切られた時の、あれなんですけど、その時にその部分をまた違う本にしたいとは思ったりしますか？

渡邊　んーと、そうですねー。ま、でも、全部を形に残さなくても、これは自分の心の中で宝物として持っていてもいいのかなと、その時は、ちょっと冷静に距離を置いて考えるようにしたので、また、パート2、パート3を出そうという気はなかったです。

H　ありがとうございます。

I　えっとー、あの、本を出版されたっていうのについてなんですけど、その、本を出版してから、なんか全然、あれ、書こうと思わなかったですか？

渡邊　えと、その出版をした時には、あの、大人向けの本だったので、その本を読んでくれた人たちが、「もう少し子ども向けに、難民キャンプのことを伝えられるものを、いつか書いてください」ということを言われた、たくさん声をいただいたので、「あ、そうだな、難民キャンプの中がどういう風になってるのかとか、難民の人たちがどういう風に暮らしているのかを、もう少し小学生とか、中学生にも分かる言葉で、えーと、書けたらいいな」と、その時は、すごく思いました。

J　えっとー、今、その、大人、あ、大人向けの本を作ったんですけど、あ、って言われたんですけど、その、将来、その、こど、あー、その、中学生から小学生とかいろんな世代に図書館を、あ、図書館じゃない、まあその、本、ん？、あ、えー、あ、その、難民キャンプとかの人の気持ちを考えてもらったりとか、先生はしてほしいですか？

渡邊　そうですね。できれば、今度は絵本の形で、作れたらいいなーという夢は持っています。小学生とかにも、ぜひ伝えられたらいいなとか、そういう、あの、〔聞き取れず〕はありますけど。

K　結局のところ、司書という仕事をしてきて、一番良かった経験っていうのは何ですか？

渡邊　えと、本を通して、日本の子どもたちだけじゃなく、そういう海外の子どもたちも、んー、本を通じての世界は広がるんだなという思いを伝えられる仕事だったかなという風に思っています。私はもともとは子どもに関わる仕事につきたいとは思ってたんですけれども、そうやって本を通して、日本だけじゃなく世界の子どもたちにも関われる、うん、ことになったので、そういう意味では司書の仕事につけて良かった、嬉しい、良かったなと思ってます。

L　あ、じゃ、その時は、こう、んー、なんか、自分の本が、こう、なんか色々なことの、色々な人に考えとかを知ってもらって、〔聞き取れず〕考えてることとか、どういう〔聞き取れず〕本、本を出版して、その、自分の考えが、えっとー、本を通して、他の人に知ってもらえた時って、どんな気持ちでしたか？

渡邊　んー、そうですね。どうしても難民キャンプの中で、仕事ができるという日本人って少ない、限られてると思うんですけれど、しかも、それが医療であったり、その、学校を建設するとか、そういうことじゃなくて、図書館ということで、中に入れたっていうことは、すごく珍しいことだと思っているんですけど、私はあのー、むしろ本が出たことによって、難民キャンプの人とか現地の人がすごく喜んでくれたことが嬉しかったです。っていうのは、日本の人たちがあまりに難民、とか難民キャンプのことを知らないんだなっていうことを、難民キャンプの人たちが、あの、考えていて、そのー、日本人の人たちに自分たちの暮らしであったり、難民として生きることがどういうことなのかを、あなたを通して伝えてくれたということは嬉しいですと、あの、現地の人から、言ってもらえたことが、とても嬉しかったです。はい。

L　はい。ありがとうございました。

渡邊　ありがとうございました。

廣瀬　えー、では、そろそろ時間になりますので、えー、本日の「この人にインタビュー」はこれで終わりになります。渡邊先生、ありがとうございました。

渡邊　ありがとうございました。

一同　ありがとうございました。（拍手）

2015 年　　月　　日（　　）

インタビュー　プロトコル（2組）

一年　　組　　番（　　）

ゲスト　渡邊先生
4班第一インタビューアー　Aさん
4班第二インタビューアー　Bくん
5班第一インタビューアー　Cくん
5班第二インタビューアー　Dくん
1班第一インタビューアー　Eさん
1班第二インタビューアー　Fくん
6班第一インタビューアー　Gさん
6班第二インタビューアー　Hくん
2班第一インタビューアー　Iさん
2班第二インタビューアー　Jさん
3班第一インタビューアー　Kさん
3班第二インタビューアー　Lさん
司会　廣瀬

（以下、敬称略）

廣瀬　それでは、今日の「この人にインタビュー」。えー、ゲストは渡邊先生です。

一同　（拍手）

廣瀬　え、今日は先日の国際教養の時間で、まあ、お話しいただいた難民キャンプでのお話であったり、日々の、え、司書のお仕事の内容などを中心にお話を伺いたいと思います。では、インタビュアーの方、えー、よろしくお願いします。

A　あ、今日はよろしくお願いします。

渡邊　よろしくお願いします。

A　えー、渡邊先生はいつも司書として、あ、司書さんとして、えー、一人でメディアセンターで働い、あ、仕事をされているというイメージなのですが、普段は特に誰先生と仲が良いんでしょうか？

渡邊　あ、この学校で、ですよね？

A　はい。

渡邊　えーとー、一番良くお喋りするのは、国語の石川先生です。

B　ああ。（あいづち）

渡邊　石川先生は、休み時間にポッと来てくださって、最近読んだ楽しい本の紹介だとか、色々してくださって、本も貸してくれたり、漫画も貸してくださったりするんですね。すごい楽しいです。

B　あ、えっと、僕たちも、えっと、古文の授業で石川先生なんですけど

渡邊　あ、習ってますか？

B　えっと、たまに、その、石川先生が本とか持ってきて僕たちに紹介するんですけど、その本って、えっと、勧めたりとかしたりしてるんですか？

渡邊　あ、えっと、皆さんに？

B　ああ、その

渡邊　あ、石川先生が紹介した本を？あ、それはすぐ来ます。うん、すぐ来てくださって、「今日こういう授業でこういう本を紹介したんだけども、図書館でも買ったら？」とか、色々、うん、石川先生とはすごく良い連携をしながら、仕事ができていると思います。

C　え、小林です。えっとー、そのー、図書館を現地で作ったんですが、その、図書館を作り上げた時、どういう気持ちでしたか？

渡邊　そうですねー、初めて、建物がまず、難民キャンプに建った時は、もう、ディズニーランドのこの、シンデレラ城ができたかのような。すーごく嬉しかったです。建物もきれいでしたし。それに、割と二週間ぐらいでババババッと作ってくれたので、建物がそんなに早く作れるっていうことに驚きましたね。あと、もうとにかく作ってる時から子供たちが「いつできるのかな、いつできるのかなー」と待ち遠しく思ってくれてたのが、うん、すごく記憶に残ってます。

D　えー、子供たちが、その、図書館を出来た時に、中に入っていって、本を読んだりしている様子はどんな感じでしたか？

渡邊　もう、すごくにぎやかでした。みんな声を出しながらワーワーワーワー、こう、本を読んでたので、小鳥がいっぱいさえずってるような、虫が、こう、葉っぱをムシャムシャムシャムシャムシャって勢いよく食べているような、そんな勢いを感じました。

E　はい、えっと、図書館を作った時に、嬉しいってありましたが、ボランティアをして、他に一番嬉しかったことはありますか？

渡邊　一番嬉しかったことは、あのー、子供たちがたくさん来て本を読んでる姿を見て、大人の人たちがすごく喜んでくれて、「自分たちが子供の時は、こんな本なんてね、なかった、でも自分の子供にはこうやって本が読める環境ができて嬉しいんです」って言って、お母さんとかお父さんがもう、握手握手だって、すごく感激してくれて。子供たちが、こう、元気に過ごしてる姿を見ると大人も、希望が持てるんだなーというのを、すごく感じましたね。

F　今、あの、大人の人の、そういう気持ちっていうのを教えてもらったんですけど。

渡邊　はい。

F　えっとー、図書館が出来た時の、この、子供たちの気持ちっていうのは、ご自分で考えて、どう思いますか？

渡邊　んー、図書館と言っても、最初に図書館が出来た時は、本が３００冊ぐらいしかなくて、日本の図書館に比べたら、本当に少ない数だったんですけど、子供たちは「本がたくさんあるー」と言ってくれて、「ああ、本が読める環境があるっていうことがこんなに喜びにつながるんだなー」っていうのを、改めて本の力というのを感じました。

G　えーと、えっとこっち側なんですけど。

渡邊　はい。（向き直る）

G　えと、ボランティアに参加して、色々な良い体験とか経験ができたと思うんですけど、えと、ボランティアから帰ってきて、大きく考えが変わったことは何ですか？

渡邊　えーとですね、私はすごく、ちょっと性格が変わったなーと自分で思うのは、最初はすごく、私、すごくせっかちな人間だったんですね、日本にいる時には。時間通りに、こう、物事がチャッチャッチャッチャッチャッと進んで、それに応じて、こう、チャッチャッチャッチャッと、色々こなしていく方だったんですけど。その一、アジアに行ったら割と時間が、こう、フワーンワワーンとゆっくり流れていて、ちょっとしたことにも、こう、「大したことないよ、そんなこと」っていう風に言われるので、日本に帰ってきてから、うーん、あまり細かいことにこだわらない、のんびりした人に、ちょっと変わったと思います。それはー、うん、アジアの人たちに関わって、ずいぶん自分が変わったなと思いました。

H　その、のんびりした性格に変わったっていうのは、なんで、変わったと、あー、なんで変わったと、思いますか？

渡邊　んー、やっぱり細かいことを、あまり悩んだり、気にしなくていいんだなーというポジティブな考え方というか、んー、ちょっとした悩み事も「あ、大したことない、大丈夫大丈夫」って思えるようになったので、「急いでなんか解決しなきゃ、ワーワーワーワーっとこう、焦って考えたりしなくなったんだろうなって。

I　ーです。

渡邊　あ、はい。

I　ボランティアから帰ってきて、今一番やりたいことは何ですか？

渡邊　今一番やりたいことは、んー、まあやっぱり現地であったことを日本の子供たちに伝えたいなというのはすごくあったんですけれど、また機会があれば、そういう本がない子供たちのいるところには、ぜひまた行きたいなという思いはすごく持ってます。

J　はい、えっと、今、また、そういうボランティアをしたいって言われたんですけど、例えば、日本の本を一冊持っていくとしたら、どんな本を選んでいきますか？

渡邊　そうですね、割と今まで、持っていって一番気に入られたのは、『大きなかぶ』。

J　ふーん。（あいづち）

渡邊　『大きなかぶ』ですね。あれはどこに行っても持っていきたいと思います。

K　えっと、今までの質問を踏まえて聞きたいんですけど、もし、無人島に一日だけ行けるとしたら

渡邊　一日だけ？（笑）

K　はい。そしたら、一つだけ持っていけるものがあったら何を持っていきたいですか？

渡邊　一日だけ。

K　はい。

渡邊　そうですねー。一日だけ。一日だけだったら、やっぱりちょっと自転車というか、乗り物みたいなのを持ってきて、こう、無人島を、こう、どんなところか探検してみたいなとは思います。

L　お気に入りの、なんか、自転車とかはありますか？

渡邊　自転車？

一同　（笑）

渡邊　お気に入りの自転車？

L　あの、自転車を持っていくという風に言われたので。

渡邊　ああ。私は自転車を、に乗るのはすごく好きです。毎日必ず、乗るというか。まあ、通勤も自転車というのはあるんですけれども。子供の時に、えーと、幼稚園ぐらいの時かな、飛行船が空をずーっと飛んでいて、それをずーっと自転車で、追っかけてったことがあります。そして、結局、迷子になってしまって。

一同　（笑）

渡邊　街の名前が、ほら、漢字がまだ読めなかったので、どこの街にいるのかも分からずに、こう、迷子になって泣いたっていう記憶はあります。小さいときは自転車が好きだったっていうことです。

L　じゃあ、ありがとうございました。

廣瀬　それでは、えー、そろそろ時間になりますので、本日の「この人にインタビュー」は、えー、ここら辺で終わりたいと思います。渡邊先生、ありがとうございました。

渡邊　ありがとうございました。

一同　ありがとうございました。（拍手）

2015 年　　月　　日（　　）

インタビュー　プロトコル（3組）

一年　　組　　番（　　）

ゲスト　渡邉先生
5班第一インタビュアー　Aくん
5班第二インタビュアー　Bさん
2班第一インタビュアー　Cさん
2班第二インタビュアー　Dくん
1班第一インタビュアー　Eさん
1班第二インタビュアー　Fくん
4班第一インタビュアー　Gさん
4班第二インタビュアー　Hくん
6班第一インタビュアー　Iさん
6班第二インタビュアー　Jさん
3班第一インタビュアー　Kさん
3班第二インタビュアー　Lくん
司会　廣瀬

（以下、敬称略）

廣瀬　えー、それでは、今日の「この人にインタビュー」。え、本日のゲストは渡邉先生です。

一同　（拍手）

渡邉　よろしくお願いします。

廣瀬　え、今日は先日の国際教養で伺った難民キャンプのお話であったり、まあ、日々の司書のお仕事の内容などを中心にインタビューをしたいと思います。それでは、インタビュアーの方、よろしくお願いします。

H　よろしくお願い

一同　（笑）

A　えーと、まず、現地の難民キャンプに行って、図書館を、図書室、図書館を作っていたっていう話を聞いているんですけど、そもそもなぜ、本と出会ったのかっていうことが気になったので、お願いします。な、なんで

渡邉　あ、なんで行こうと思ったのか？っていうことではなく？

A　なんで、本と出会った、のかっていう、まあ

一同　（笑）

渡邉　わ、私が子どもの頃の？

A　ああ、はい。

渡邉　ああ、ああ、ああ。えーと、私がよう、まだ幼稚園の時に、私の母が自宅で、あの、ホームライブラリーといって、図書館みたいなものを始めたんです、家で。それで、近所の子どもたちとかが来て、えーと、絵本がたくさん読めるように部屋の中にいっぱい本を置いてたんですけど、私は知らず知らずのうちに本に囲まれて育っていたので、気づいたらいつの間にか、家にたくさん本がある暮らしをしてました。

A　ありがとうございます。

渡邉　はい。

B　えっと、特にその頃印象に残っている本はありますか？

渡邉　えーと、私が小さい頃、何度も読んだのは、んー、えーと。あ、オリエンテーションの時に話しましたっけ？あの、『ハロルドの紫色のクレヨン』って。紫色のクレヨンで描くとなんでも現実になるっていう不思議なお話のお話をしたと思うんですけれど

一同　ああ（あいづち）

渡邉　あのシリーズがたくさん何冊かあって、そのシリーズはすごく、子どもの頃何度も読んだと思います。

B　ありがとうございます。

渡邉　はい。

C　えっと、その、難民キャンプのお話を聞いた時に、その、日本の図書館と、その、現地に作った図書館の、なんか、違いとか両方の良い点とか、ありますか？

渡邉　んー、そうですねー。日本の図書館の場合は、ほんとに本の数も多いし、えーと、広さもとても広いんですけれど、この教室よりもせまーい図書館でした、難民キャンプのは、この半分ぐらいの大きさだったと思いますね、難民キャンプ。そこに、本を置いてるので、本はとても少なかったのと、あと難民キャンプの中に、あのー、文字を読めない人がものすごく多いので、文字を読めない人たちにも来てもらう工夫が必要だったと思います。

D　えーとー、そのー、来てもらうための工夫っていうのは例えばどのような工夫を

渡邉　えっとー、例えば文字を読めない人たちは本が置いてあっても全然読むことができないので、図書館員の人たちに、こう、絵本を読み聞かせ？、絵本の読み聞かせに参加してもらって、こう、まずは耳から楽しんでもらう、図書館に親しんでもらうっていうことから始めました。そのうちに少しずつ、絵本って、こう、ちょっとずつ言葉を勉強するのに良いテキストになったので、文字を読めない人たちも一生懸命、こう、絵本から文字を読もうとする、勉強のためにも図書館に来てくれるようになりましたね。

E　えっと、少し、前の質問と少し似てしまうんですが、えっと、現地で大変だったことってありますか？

渡邉　現地で大変だったことは、やはり言葉が、えーと、ちゃんと伝わるのかなというところがすご

く、まず大事だった〔聞き取れず〕ので、特に私の仕事は図書館の人たちを育てることが仕事だったので、「図書館ってこういうものだよ」「絵本の読み聞かせってこうやるんだよ」という説明が、ちゃんとその人たちの胸に、どれほど伝わるのか、最初の頃はすごく不安でした。えっとー、その時、そのー、えっと、本の読み聞かせのそれを教える時に、なんか、その時に工夫したところはありますか？

F　渡邊　えーと、工夫をしたことは、なるべく身振り手振りと、あと実際にこうやってやるんだよということ、動作ですごく示して、実際にやってもらって、もう体で覚えてもらう、という教え方。ただ、こう、ずーっと喋ってるんじゃなくて、やってもらうっていうこと、の工夫をずいぶんしました。はい。

G　先ほどの質問と似てしまうんですが、えっとー、日本語が通じない異国の国で、言葉の壁っていうのは、どう乗り越えましたか？

渡邊　えーと、最初の頃は通訳の人に入ってもらっていたので、私が話した日本語を、えーと、タイ語にしてもらって、そのタイ語をさらにカレン語という言葉に通訳してもらって、こう、二段階通訳でやってもらっていたんですけれど、そのうちだんだん、あの、子どもたちにカレン語の言葉をちょっとずつ教えてもらって、んー、大人の人たちとも話すのは難しかったんですけれども、子どもたちと遊んだりすることが最後はできるぐらいに、カレン語は、できるようにはなりました。

H　えっとー、その、言語の壁を越えるのに、どれぐらい時間がかかりましたか？

渡邊　んー、でも、言葉は通じなくても、子どもたちはすごく、んー、一緒に遊んでくれたり、えーと、ルール、遊びのルールが、もう私混じってても全くちんぷんかんぷんなんですけど、「こうやるんだよ」「ああやるんだよ」っていうのを身振り手振りで教えてくれて、こう、すぐ、こう、すごく仲間に入れてくれるっていうことを、あの、子どもたちの方がしてくれたので、「あ、言葉の壁っていうよりも、気持ちが一緒に寄り添うと、すごく、んー、国境を越えて距離が縮まるものだな」っていう経験ができたと思います。

I　えっと、今までの質問を踏まえて、えっと、難民キャンプでの体験で自分が変わったと思うところは、何でしょうか？

渡邊　えーと、私はもともと難民キャンプに行く前はすごくせっかちな、えーと、性格だったんですね。何でも早く、こう、終わらせたかったり、時間通りに物事が進む方が気持ちがいいなと思ってたんですけど、難民キャンプに行くと、もう時間通りに物事が進まないというのが当たり前だったので、えーと、そういう意味では、すごく、日本に帰ってきてから、柔軟な人になったというか、ちょっとした細かいことにもこだわらなくなりましたし、何か大変なことがあっても、「ああ、なんとかなる、大丈夫大丈夫」っていう気持ちのゆとりをもって、えーと、過ごせるようになったので、ずいぶん、行く前と今とでは性格がずいぶん変わったと思います。行く前にもしここで働いてたら、もうちょっとピリピリとした状態で皆さんと接していたんじゃないかと思います。はい。

J　自分にゆとりをもつことで、今の生活に役立てていることは何ですか？

渡邊　んー、そうですね。初めて会った人も、あのー、すごく早く親しくなれるというか、初対面の人に対しても受け入れる気持ちというのが、んー、前、前はもう少し人見知りな方だったと思うんですけど、人見知りしなくなったというのはあるかも知れないですね、日常生活の中で。新しいところに入っていくというのもあまり億劫じゃなくなったので、難民キャンプに飛び込んだ経験が他の日常生活でもすごく活きてると思います。

J　ありがとうございます。

渡邊　はい。

K　今日の渡邊先生が〔聞き取れず〕難民キャンプで活動したと思うんですけど、これから、あの、どんな、こういうボランティア活動をする予定ですか？

渡邊　そうですね。やっぱり私はこの、本に関わる仕事をしているので、本に関わることでのボランティア活動だったら、どんな形でもいいからやりたいなとは思っています。また、難民キャンプだけじゃなく、そういう、本なんて一冊も見たことないっていう国の子どもたちのところで、いつかまた働けたらなーと思ってます。

L　えっと、そのー、本を見たことがない国っていうのは、例えばどんな国の

渡邊　私は最初はむしろアジアではなく、アフリカの方に行きたいなと思っていて、部屋にもアフリカの大きな地図を貼ってたぐらい、アフリカで働きたいなって思ってたんですけど。んー、いつかはそちらに行きたいなとも思っています。

廣瀬　はい。えー、それでは、そろそろ時間になりますので、えー、今日の「この人にインタビュー」は、えー、このあたりで終わりにしたいと思います。えー、渡邊先生、ありがとうございました。

渡邊　あ、どうもありがとうございました。

一同　（拍手）

2015 年　　月　　日（　　）

インタビュー　プロトコル（4組）

一年　　組　　番（　　）

ゲスト	渡邉先生
1班第一インタビュアー	Aさん
1班第二インタビュアー	Bくん
2班第一インタビュアー	Cさん
2班第二インタビュアー	Dさん
6班第一インタビュアー	Eさん
6班第二インタビュアー	Fさん
5班第一インタビュアー	Gさん
5班第二インタビュアー	Hくん
4班第一インタビュアー	Iさん
4班第二インタビュアー	Jさん
3班第一インタビュアー	Kさん
3班第二インタビュアー	Lさん
司会	廣瀬

（以下、敬称略）

廣瀬　えー、それでは、今日の「この人にインタビュー」。ゲストは渡邉先生です。

一同　（拍手）

渡邉　よろしくお願いします。

廣瀬　えー、今日は、まあ、先日の国際教養の、えー、時に伺った難民キャンプのお話であったり、まあ、日々の司書のお仕事を中心にインタビューをしたいと思います。では、インタビュアーの方、よろしくお願いします。

A　ほい、あ、はい。

A　（笑）

一同　一番目の質問として、本との関わりをきっかけに聞きたいんですけど、小さい頃から本は好きでしたか？

渡邉　えーと、ええ、あの、子どもの頃は絵本が大好きでした。私の家は、あのー、私の母が、えーと、私が幼稚園の時に、ホームライブラリーと言って、自宅を図書館のような感じで、えーと、絵本をたくさん置いて近所の子どもたちを、こう、招き入れる図書館のようなものをしてたんですけれども、私もその影響で気づいたらたくさんの本に囲まれて育ってたんです。なので、本が大好きな子どもだったと思います。

B　えっと、その、絵本を読んだっていうことだったんですけど、えとー、絵本の中でも、えーと、『はじめてのおつかい』とか、

B　ああ（あいづち）

渡邉　なんかそういういろんな種類があると思うんですけど、何が好きですか？

B　えーと、どちらかというと『はじめてのおつかい』の主人公はとても、あのー、お母さんの言いつけを守って一生懸命お買い物に行くいい女の子、あの、えーと、えー、賢い女の子だったと思うんですけれども、私はもうちょっと冒険に出ていくような、こう、無茶をするような主人公が出てくるお話の方が好きでした。

C　えーと、あのちょっと話題が変わるんですけど、なぜ、あの、日本じゃなくてミャンマーで図書館をつくったんですか？

渡邉　えーとー、ちょっと今お話をしたんですけれど、私はずーっと小さい頃から絵本に囲まれて過ごしてきたので、本が身の周りにあることが当たり前だと思って生きてきたんですね。それが中学生や高校生になってきて、「あ、世界には絵本なんて一冊も見たことのない子どもたちがいるんだな」というのをニュースとかで知るようになった時に、「あ、そういう本を知らない子どもたちのそばに行って、いつか本、絵本の楽しさを知らせるような仕事につきたいな」と思ってたんです。それで、あのー、難民キャンプのお話をいただいた時にはもう、すぐ「はい、行きます」ということで、行きました。

D　そうなんですか。ところで、そういう、図書館をつくるとか、そういうために必要な勉強っていうのはどこでしたんですか？

渡邉　えーと、私は司書になろうとは全く、あのー、学生の頃は考えていなかったんですけれど、社会人になって働きながら、えーと、司書の資格というものを通信教育で取りました。その時に一生懸命、こう、「司書とは」ということを勉強して、えーと、実際に公共図書館に、あのー、実習に行ったりして、少しずつ勉強したという感じです。

E　なんか、〔聞き取れず〕ならではの図書館の〔聞き取れず〕とかあったんですか？

渡邉　そうですね。あの、日本のように、あの、便利なものはほとんどないので、電気がない図書館はどうやってつくったらいいのかとか、あと、建物も竹とユーカリしか、あの、素材しかないので、その中でどういう風に建物を建てたらいいんだろうかとか、本が少ないのにどういう風な工夫をして子どもたちに来てもらえるようにしたらいいのかとか。物がとにかく日本よりも無いので、無い中である物を使ってどういう風に図書館をつくるのかということで、ひとつ考えて作りました。

F　えっと、先ほど図書館をつくりにミャンマーへ行った理由とか〔聞き取れず〕とか、えっと、ミャンマーに行って得たことは何ですか？

渡邉　んー、そうですね。私はあのー、その、難民キャンプの仕事に関わるまでは、あんまり「幸せって何だろう」とか考えたことがなかった、真剣に考えたことがなかったんですけれど、現在、あの、現地に行ってみると、あのー、本当に命を脅かされて皆さん生きていて、えー、突然家が爆撃されるんじゃないかとか、親が誘拐されてしまうんじゃないかとか、子どもたちって、こう、おびえながら暮らしているのを見ると、「あ、日本のように夜、何の悩みもなく、自分の親が殺されるんじゃないかとか、悩むことなくぐっすり眠れることだけでも幸せなことなんだな」ということをすごく感じました。

F　はい、えっと、その得たことっていうのは、やっぱり、みんなの支えがあってとか、周りの〔聞き取れず〕とか、どのようにして得たものですか？

渡邉　そうですね。あのー、得たものということでとても大きかったのは、んー、やっぱり日本だろうとミャンマーだろうと、大人の人たちが子どもたちのためであることであれば力を尽くしたいっていうか頑張ろうっていう気持ちがとても強くて、そういう目的が一緒だと国境を越えて、何人だろうと関係なく、協力し合えるんだなとすごく思いました。もちろん言葉が流暢に話せれば、もうちょっと意思の疎通ができたと思うんですけれど、あの、「子どもたちのために頑張ろうね」という気持ちが、一つの目的が一緒だと、現地の人ともすごく、困難を乗り越えて一緒に頑張れたなと思いました。

E　やっぱり、その、なんか、得たこととか、なんか、そこで学んだことっていうのは、やっぱりなんか、本を読みに来てくれる子どもたちがたくさんいたからとか、その、なんか

渡邉　そうですね。子どもたちが毎朝、あの、一人の子どもが朝学校に行く前にも来て、お昼休みにも来て、授業の合間の休み時間にも来て、放課後にも来てということで、一人の子どもがもう一日に何回も何回も図書館に来るのを見ていると、「あ、ほんとに図書館ができて、読むことが体全身で喜んでくれてるんだな」というのを感じると図書館づくりに関われて良かったなとすごく思いました。

F　えっと、その図書館の大変さというのを、ミャンマーの子たちを見て、関心があるんですけど、その得たことっていうのを今後活用できる場所はどこだと思いますか？

渡邉　そうですね。途上国で図書館を作るというノウハウみたいなものを、自分の中で得たので、また別な国で、

G　えーと、本の喜びを知らない子どもたちのいるところであれば、また行きたいなという風に思ってます。えーと、ミャンマーに行った後、このＩＳＳに来た〔聞き取れず〕、けど、なんでここの司書になろうと思ったんですか？

渡邉　えーと、ここの司書になれたのはほんとに、あのー、たまたまご縁があって、私の前にいた司書さんというのが、えー、千葉県の奥地のとても遠いところから通ってらしたんですね。それで、とても通勤も大変なので、「あなた、ミャンマー帰ってきて、あのー、暇そうだし、練馬区に住んでるんだから、ちょっと変わってくれない？」ということで声をかけていただいたのがまずひとつと、あと、国際中等にちょうど切り替わるところだったんですね。私が入ったのはまだ大泉、附属大泉中の時代だったんですけれど、その時に学校としても、「国際中等になるので、海外の経験のある司書さんにぜひ、あの、どうぞ」ということで、声をかけていただいたので、本当にご縁があってだと思います。

笠神　ありがとうございます。

H　えっと、ここの司書になって、なんか、いい経験とかありましたか？

渡邉　あ、それはほんとにあの、日々、あのー、ここの学校の場合はいろんな経験をしてる子どもたちが集っているので、そういう意味では、あの、一年生にもそうですけれど、難民キャンプのお話をさせてもらう機会が授業の中で、えーと、つくってくださったり。私は日本に帰ってきてからキャンプであったことを日本の子どもたちに伝えたいなという思いが強かったので、そういう機会をもらえているこの学校に来られて、「あ、ほんとに良かったな」と思ってます。

G　えっと、今、ミャンマーで得たこととかは、この学校に来てから活かしてますか？

渡邉　例えば、あの、ディスプレイをつくる場合なども、あのー、なるべくリサイクルなもので、作るというのを図書委員会と一緒に取り組んでいます。例えば、あのー、こう、ちょっとした、ほんとはごみになりそうな物を使って、館内ディスプレイをしたりとか、ある物で工夫をする力というものはついたと思います。それは活かしてますね。

I　えっと、あの、今ＩＳＳの司書になって良かったこととか、〔聞き取れず〕ですけど、あの、学校生活とかで、あの、来て良かったこととかありますか？

渡邉　そうですね。んー、学校生活で良かったこと。働いて、ここで働いていて。そうですね。んー、やっぱり私すごく楽しんでいるのは、えーと、この学校は1年生から6年生までずーっと六学年いて、図書館で働いていると、どの学年ともいつでも関われるというか。そして、1年生に入学した後、卒業するまでずーっと六年間成長を見ることができるので、えーと、本を通じて、こう、あの、生徒の皆さんの成長が見られる、六年間も見られるということでは、すごくやりがいがあるポジションだなと思ってます。はい。

J　あの、ＩＳＳならではの、なんかこう、他の小学校とか中学校とかにはない本とかありますか？

渡邉　えーとですね、やっぱり他言語の本がとても多いので、英語だけではなく、あの、他の言語の本が置いてあるというのはなかなか他の学校では見られないことだと思いますし、あと、とても館内が広いので、時々館内で例えばボランティア部が、あの、展示会をしたり、先生方が、この、例えばパレスチナに行ったので写真展をしますとか。生徒も先生方も本を借りるだけじゃなく、この図書館の中で様々な情報を発信するような図書館になっているというのが、ちょっと他の学校図書館にはないので自慢できることかなと思ってます。

K　えっと、全然違う話なんですけど、死ぬ前にやりたい五個のことは何ですか？

渡邉　死ぬ前にやりたい五個のこと？五個のこと？えー、五個も？（笑）え、どうしようかなー。そうですね。えーと、んー、そうだな、五個のこと。

一同　（笑）

渡邉　そうですね、何がしたいかな、死ぬ前に。ま、一つは仕事では、私は最初は、あの、アフリカの子どもたちに関わりたいと思ってたので、そちらの方の図書館活動には関わりたいという風には思っていること。えと、あとー、んー、そうだなー。えー、私はちょっと楽器をやっているので、えーと、年を取ってから、この、おじいちゃんおばあちゃんだけでのオーケストラで演奏はしてみたいなと思っていることと。あとー、そうですねー、んー、やっぱりここの学校に来て、世界の食文化、いろんな食文化の本を、こう、家庭科から集めてくださいと言われて、様々な国の料理の本を眺める機会が多いんですけれども、あの、食べたことのないものは色々チャレンジしたいと思ってますね。そうですねー、あと二つか、そうだなー（笑）

一同　（笑）

渡邉　そうですね、なんだろうな。んー、えーと、高い所から、こう、地球を眺めるのが好きなので、いつか気球みたいなものには乗ってみたいなとは思ってます。そうですねー、あと一つ。何かな。（笑）そうですね、えーと、んー。何だろうなー、あと一つ。そうね、あと一つは何でしょう、すぐには思いつかない。宿題にしてもらえるわけにはいかないですもんね、今答えた方が（笑）何かな、ちょっと予想外の質問でした（笑）何かな、えー。ま、難民キャンプの子どもたち、私が関わった時にはまだ小学生の子どもたちがほとんどだったんですけれども、今はもう二十歳を越えて大きくなってると思うので、いつか難民キャンプで出会った子どもたちと同窓会のような、うん、いつかこう、あの時どうだったん、子どもの時に図書館ができた時の感想とか、また再開したいなと思っています。

K　はい、ありがとうございます。

渡邉　はい

L　え、今、ちょっと答えるのに迷ってたんですけど、それはやっぱり、なんか、いろんな〔聞き取れず〕やりたいことを、なんか、自分でやってきたというか、努力して、全部成功させたからっていうのはありますか？

渡邉　いや、でも私はとてもあの、成功したというか、えーと、とても失敗が多い人間なので、とてもそそっかしいという話はオリエンテーションでしたと思うんですけど、私はとても日々失敗が多くて、タイで働いてた時にも、あの、周りのタイの人たちから、「日本人って、もっとしっかりした民族だと思ってた」って言われるぐらい、結構まあ、あの、皆さんに迷惑をかけて失敗もしたんですけれど、でも失敗をしたことによって、逆に周りの人たちが、「あ、この人って、一人では危ないかも知れない、常に、こう、何か手伝ってあげた方がいいな」ということで、まあ、いつも周りに誰か彼かいたんですね。なので、私はむしろ一人で頑張ろうというよりも、そういう周りの助けを借りながら、支えてもらいながら、常に仕事をしてきてると思っているので、んー、そんなに成功したなという風には思ってないですけれど。でも、失敗をすることをあまりマイナスと思わずに、うん、周りの縁をありがたく思いながら、えっと、日々過ごしてると思います。

廣瀬　はい。えー、それでは、そろそろ時間になりますので、えー、本日の「この人にインタビュー」はこのあたりで終わりたいと思います。えー、渡邉先生、ありがとうございました。

渡邉　あ、どうもありがとうございました。

一同　ありがとうございました（拍手）